

Special Essay

コーヒーブレイク

公衆衛生学講座

柴田 彰

米国の映画界には、映画芸術科学アカデミー会員の投票で選ぶ年次映画賞であるアカデミー賞があり、映画人なら誰でも(外国人でも)その受賞を目標としている。その前哨戦とも言えるのが、ハリウッド外国人映画記者協会(Hollywood Foreign Press Association, HFPA)に所属する会員の投票で受賞作が決定されるゴールデングローブ賞である。先日そのゴールデングローブ賞授賞式の模様を録画で見ていると、作品賞、主演男・女優賞、等、数ある賞の中で、スティーブン・スピルバーグ監督が、その功績を称えられセシル・B・デミル賞(生涯功労賞)を受賞したということであった。この賞はこれまで俳優に授与されてきたが、監督として受賞するのは1972年のアルフレッド・ヒッチコック以来2人目ということらしい。

スピルバーグ監督はこれ迄にも、「シンドラーマのリスト」や「プライベートライアン」でアカデミー賞監督賞をまた、他の作品でも多くの賞を受賞しているが、その授賞式で次々と紹介されるタイトルと映像の断片を見ていると、これも、あれも…と思い出された。「激突」、「E.T.」、「ジョーズ」、「未知との遭遇」、「インディージョーンズ」、「プライベートライアン」、「アミスタッド」など、もちろん皆さんも見られた作品は多いと思う。特に、リアルな動きで本物と思わせるような恐竜を登場させた「ジュラシックパーク」や、実在のオスカー・シンドラーマがナチスドイツの迫害から一人でも多くの人々を助け出そうとした姿に人々の涙を誘った「シンドラーマのリスト」は印象深い。他の作品も話題作ばかりで、幅広いジャンルに真っ先に挑戦し続けているのは素晴らしいことである。

授賞式のスピーチで、スピルバーグ監督は、作品作りには「ひらめき」が大事であると言っていた。他の監督の多くの作品を見る事や多くの人々との関わりがあるからこそ、この「ひらめき」があり、これ迄続けられているということであった。言葉では簡単なことでも、地道で困難な作業を根気よく続けなければならないはずだ。きっと、これからも人々を驚かせ、楽しませ、勇気を与え、感動させてくれるだろう。

